

NO BAMBOO,  
NO LIFE !

SAITO MASAMITSU



## NO BAMBOO, NO LIFE !

1983年、竹芸家の藤沼昇さんの家で作品を見せてもらう機会がありました。それは艶のある煤竹を粗く編んだとても大きな籠で「彫刻家のクレス・オルテンバーグが竹で何かを制作したらこうなるのではないか!？」という思いが頭をよぎりました。その時、私の中で何か新しい扉が開いたような気がしたのです。

当時の私は、直前まで東京のレコード会社で働いており、独立し起業して今風に言えばブランディングやマーケティングのような仕事をしようとしていました。「こんな面白いものを世に売り出せないのか?」と、新しい仕事のひとつとして竹芸に取り組みました。展覧会をしたり、雑誌に売り込んだり、竹籠を使って華道の流派のポスターを制作したりなどということです。

1985年、竹橋にあった東京国立近代美術館の工芸館で「竹の工芸」展が開催されました。竹芸を取り上げたものとしては戦後最大の規模と内容の素晴らしい展覧会でした。そこで初めて飯塚琅玕齋、田辺竹雲齋、生野祥雲齋などの名工の作品を見たのです。伝統の竹芸の流れを知った私は「現代の竹芸というテーマで展覧会をやってみたい」と思い、地元の新聞社に話を持ちかけて人間国宝の飯塚小玕齋さんの所へ相談に行きました。しかし、賛成どころか、えらい剣幕で反対され撃沈。今から思えばこの馬の骨かもわからない若者が竹芸の展覧会をするなんて、とても信じられる話ではなかったのでしょう。

竹がきちんとした仕事になった最初はそのしばらく後のことです。栃木県立美術館が飯塚琅玕齋の展覧会をするということで、集客を増やす方法について相談されました。琅玕齋は栃木県出身で、明治から戦前期にかけては大いに評価されていた作家でしたが、当時は県民でも知らないような状況でした。再評価のきっかけになればということで始まった企画だったのでしょう。

それならば美しい写真で竹籠をアピールができないかと、『家庭画報』に特集記事を組んでくれるようにお願いに行きました。美術関連の専門誌に竹芸が載ることはあっても、ファッション誌や婦人誌のジャンルで取り上げられてはいなかったのが、チャンスがあると思ったのです。花人の川瀬敏郎さんをお願いして琅玕齋の籠に花を入れてもらいました。それは想像を遥かに超える美しさで、特集ページとして誌面を飾ることができました。

この記事が出るまでは『家庭画報』のような婦人向け雑誌でも琅玕齋はもとより、きちんと竹芸について知っている編集者は皆無でした。しかし、これ以後、『婦人画報』や『和楽』などの女性誌で特集を組んでいただけるようになりました。婦人誌はお花をさされている方々が購読されているので、花籠の特集はいつも好評です。

とはいえ、この頃の私にとって竹芸に関することは趣味的に行っていた活動です。時代はバブルの絶頂期。主宰していた会社ではディズニーのデザイナーを起用して、プロ野球チームや中央競馬会のCIに関わる仕事などを主軸にしていました。

1990年代の後半になり、アメリカで竹工芸がちょっとしたブームになっているというニュースが耳に入ります。ニュートロジーナというスキンケアブランドの会長だったロイド・コツェンさんが個人的に収集した竹工芸の展覧会が全米を巡回し、評判になっていたのです。私はロサンゼルスにあったコツェンさんの作品保管庫を訪ねる機会に恵まれました。そこには、過去から現代までの作家を含む1,000点を越すコレクションが保管されていたのです。日本にはたくさんの竹芸家がいる、バリエーションに富んだユニークな作品があることを、アメリカの地で再認識することになりました。

コツェンさんは、アメリカを巡回した展覧会を日本に里帰りさせたいという希望を持っていました。私は彼の代理人となり、日本経済新聞社に展覧会の主催者になっていただくよう依頼。結果として『竹の造形 ロイド・コツェン・コレクション展』というタイトルで、2003年から2004年にかけて日本国内6か所の美術館での開催に漕ぎ着けることができました。今から思えば、この展覧会に関わったことから、竹工芸に関することが私の人生の大半を占めるようになっていきます。

アメリカでのブームは日本には届いておらず、まだこの頃は骨董屋、神社の骨董市、街のリサイクル屋などにたくさん竹籠がありました。玉石混交でしたが、面白いものを見つけては片端から買って、実物から学ぶということを繰り返しました。

この時期、私の竹工芸のコレクションが大きくなるもう一つの理由が始まりました。それはインターネットで多くの竹籠が見つけれられるようになったことです。わざわざ探しに出かけなくとも、面白い竹籠が見つけれられるようになったのです。インターネットでのオークションサービスなども始まった頃で最初の数年間くらいは竹籠に入札する人は私の外に数人しかいませんでした。この時にいつも私と競り合っていたのが、後に友人となるコレクターのトラヴィス・ランディさんです。(トラヴィスさんとは『目の眼』(2011年8月号)の「飯塚琅玕斎特集」や2018年の『Fendre l'air: Art du bambou au Japon』展の図録で日本の竹工芸について対談をしているので見ていただくと嬉しいです)。

同じころ、日本美術の展覧会『アメリカから来た日本：クラーク財団日本美術コレクション』を日本で巡回されていたコレクターのビル・クラークさんとお会いしました。彼のカリフォルニアの美術館を訪ねて竹籠をコレクションされていると知り、すぐに仲良くなりました。ある時、ビルさんから現代作家の植松竹邑さんの作品を見たいというリクエストをもらいました。幅が2mを越す作品もあり、展示場所がなくて困っていたところ、植松さんが住んでいる地域の公立美術館が場所を貸して下さり、一日限りのプライベート展示ができたことは良い思い出です。植松さんの作品は無事にビルさんの所有となり、2008年のニューヨーク・ジャパソサエティで開催された展覧会『New Bamboo: Contemporary Japanese Masters』では、植松作品のブースまで設けていただきました。ビルさんの死後、彼のコレクションの作品は植松さんのものも含めて、ミネアポリス美術館やポストン美術館に寄贈されました。

この辺りから竹工芸の日本での評価も上がり、アメリカに竹工芸専門のギャラリーもでき

るほどになりました。日本では飯塚琅玕齋を中心に、竹工芸の評価と価格がすごい勢いで上がっていきます。私のところへも海外から問い合わせが入るようになったのです。

実はこの頃までには私の家は籠に占拠されていました。ギャラリーなどから依頼されて、小規模な竹籠展を開催して作品を整理はしていましたが、とても間に合いません。そして「新しい竹籠を見つけたら買って見てみたい、でもお金がない」という問題を常に抱えていました。

このジレンマを解消すべく、主に外国のコレクターや美術館に作品を販売し、資金を作っては次を買うようになります。面白いことに、過去に海外には相当数の作品が輸出されており、まだ評価が定まっていないものがたくさんありました。実は私は結構な点数の日本の竹工芸作品を海外のギャラリーから購入していたのです。

アメリカでの竹工芸収集への過熱は、次の世代や地域に伝播し、新しいコレクターや作品の収集に興味を持つ美術館が増えていきます。確か、2007年のことだったと思います。2mにもなるのではないかという大きなアメリカ人男性が私の竹籠が見たいと栃木の家を訪ねてきました。話をしているうちに、見てきた映画、聞いていた音楽、そして年齢（誕生日まで）が私と一緒にだとなり意気投合。後に友人となったマイケル・ソネンフェルトさんは、竹だけではなく、人形など多くの日本の工芸に造詣の深い方です。日本の文化の未来を本気で考えてくれている彼は、私が関わり2021年に始めた「ジャパクラフト21」という運動のスポンサーになってくれました。

2010年代後半には、海外の有名美術館で立て続けに大きな展覧会が開催されました。2017年のニューヨーク・メトロポリタン美術館で開催された『Japanese Bamboo Art: The Abbey Collection』のアビーご夫妻や、2018年、フランス・パリの国立ケブランリー美術館で開催された『Fendre l'air: Art du bambou au Japon』展のステファン・マルタン館長はわざわざ栃木の家まで来てくださりました。どちらの展覧会にもできる限りのお手伝いをさせていただきました。2016年にはオーストラリア・メルボルンのビクトリア国立美術館でマイヤーファミリーの竹籠コレクション展『Bamboo: Tradition in Contemporary Form』がありました。私は少しだけの協力でしたが、マイヤーさんが自分の飛行機で送迎してくださり、日本とのスケールの大きさの違いに驚きました。

日本にも海外の竹工芸への人気は伝わり、大規模な展覧会が開催されるようになります。2018年、以前から構想し提案していた『線の造形、線の空間：飯塚琅玕齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸』展が、菊池寛実智美術館で開催となったことは大変感慨深いものでした。そして、前述のメトロポリタン美術館の展覧会は2019年に来日し、『竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・コレクション』というタイトルで、東京国立近代美術館工芸館などで開催されました。

最近では、ファッションやデザイン、建築関係の若いアーティストたちが竹籠に興味を持ってくれるようになってきたことを嬉しく思っています。例えば、デザイナーの黒河内真衣子さんが主宰するファッションブランドMame Kurogouchiの2023年のコレクションは、

飯塚琅玕齋らの作品を着想の源とするコレクションを発表。私も見せていただいたパリコレでのショーはとても素晴らしいものでした。ランウェイを歩くモデルが着用していた竹籠を思わせる服に向かって、なんと「ローカンサイ!」と大きな掛け声がかかっていたのです。

今回の展覧会は、2023年に益子町立陶芸美術館で開催した横田峰齋を中心にした小規模な展覧会『竹モダン』展の続きのようなものです。峰齋はフランスの建築家シャルロット・ペリアンと一緒に仕事をしており、建築やインテリアデザインに興味のある方々の間で話題となっています。竹工芸の世界には一般には知られていない面白い作家や作品がまだあるのです。

最初はちょっとした興味から関わりはじめた竹工芸の世界。結果として約40年間、作家や作品の紹介、展覧会や催事などの企画に携わり、多くの素晴らしい作品に触れることができました。この図録にはその間に収集し、今も手元にある中から私の好きな作品を掲載しました。

手元を離れてしまった作品は、私に人の縁をもたらしてくれました。竹籠が縁でこれほど沢山のの人々と知り会えるとは思っていませんでした。ここでお名前を挙げることでできた方は、ほんの一握りです。世界中におられる、何十人、何百人の方々のおかげで今の私があり、今の竹工芸の世界があります。同じものを見て同じように感動する人と繋がるということは、本当に大きな喜びを与えてくれるものだと実感しています。

斎藤正光



Photograph: Sato Hitomi

## NO BAMBOO, NO LIFE !

In 1983, I had the opportunity to visit the home of bamboo artist Fujinuma Noboru and see his work in person. There, one of his pieces caught my eye. It was a large basket roughly woven from lustrous *susutake* (smoked bamboo). And it struck me that if the sculptor Claes Oldenburg were ever to create something in bamboo, this might be what it would look like. It was in that very moment that something clicked, and a new door opened within me.

At that time, I had just left a record company in Tokyo and was preparing to start my own business, focusing on what we would now call branding and marketing. The encounter with this bamboo basket made me think, “Couldn’t this fascinating craft be introduced to the world?” So I began to engage with bamboo craft as one of my new endeavours; organising exhibitions, pitching stories to magazines, and even creating posters for flower arrangement schools featuring bamboo baskets.

In 1985, the Craft Gallery of the National Museum of Modern Art, Tokyo held an exhibition titled ‘Modern Bamboo Craft.’ It was the largest and most significant postwar exhibition devoted to bamboo craft, and it was there that I first encountered the works of masters such as Iizuka Rōkansai, Tanabe Chikuunsai, and Shōno Shōunsai.

Seeing these pieces helped me see the lineage of traditional bamboo craft, and inspired me to hold an exhibition exploring “contemporary bamboo art.” I approached a local newspaper and together we visited Living National Treasure Iizuka Shōkansai to seek his advice. There, instead of encouragement, I was met with fierce objection which crushed my aspiration into pieces. Looking back, though, it’s understandable. For a renowned master to be approached by an unknown young man proposing a bamboo art exhibition, it probably just didn’t seem realistic.

My first professional involvement with bamboo came a little later, when the Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts planned an exhibition on Iizuka Rōkansai and sought my advice on how to attract visitors. Although Rōkansai was born in Tochigi and was celebrated from the Meiji period (1868-1912) through the prewar years, by then even local residents barely knew his name.

To spark renewed interest, I reached out to *Kateigahō* magazine with the idea of a feature on bamboo baskets. Until then, bamboo crafts had only been featured in art journals, never in the context of fashion or women’s lifestyle: I saw an opportunity to reach an entirely new audience there.

We asked flower artist Kawase Toshirō to arrange flowers in Rōkansai’s baskets, and the result was stunning, so much so that the photographs became a full feature spread.

Until that article, virtually no editor at women’s magazines such as *Kateigahō* had any knowledge of bamboo craft, not to mention Rōkansai. After its publication, other major

magazines for female audiences like *Fujingahō* and *Waraku* began to run special features as well. Since many of their readers practiced *ikebana* (flower arrangement), the bamboo basket features were always well received.

Even then, my involvement with bamboo still remained more of a passion project than a profession. Japan was in the height of the economic bubble, and my main business focused on corporate identity work for professional baseball teams and the Japan Racing Association, often collaborating with designers from Disney.

In the late 1990s, I heard that bamboo art was becoming something of a trend in the United States. Lloyd Cotsen, who used to be the chairman of the skincare brand Neutrogena, had amassed a large private collection of bamboo works and his exhibition was touring the country, drawing great acclaim.

I had the privilege of visiting his storage facility in Los Angeles, which housed more than a thousand pieces, from historical works to contemporary creations. Standing there, I was reminded of how many remarkable bamboo artists Japan had produced, and how richly varied their works were. The trip to the United States reopened my eyes to the craft of my own country.

Cotsen hoped to bring his traveling exhibition back to Japan. I acted as his representative and persuaded Nikkei Inc. to take on the role of organiser. As a result, 'Bamboo Masterworks: Japanese Baskets from the Lloyd Cotsen Collection' toured six museums across Japan from 2003 to 2004. In hindsight, this project ignited my next phase, where the greater part of my life has been somehow related to bamboo craft.

Despite the popularity in the United States, bamboo craft was still largely overlooked in Japan then. Antique shops, shrine markets, and second hand stores were full of baskets: some exquisite, some not, but I bought anything that caught my eye, and learnt directly from interacting with the objects.

Other than going to these markets, something else began around that time that helped my bamboo collection grow rapidly: the internet. Many bamboo baskets started surfacing online and it enabled me to find unique bamboo works without taking a step outside the house. In the early years of online auctions, there were only a few people bidding on bamboo baskets. The collector Travis Lundy was one of the few. We used to bid against each other all the time, and later became close friends. (I hope you'll enjoy reading our dialogue on Japanese bamboo art in the special feature on Iizuka Shōkansai in *Me no Me* magazine, August 2011, and in the catalogue for 'Fendre l'air: Art du bambou au Japon' in 2018.)

Around the same time, I became acquainted with Bill Clark, another American collector of Japanese art when his exhibition 'Delightful Pursuits: Highlights from the Lee Institute for Japanese Art at the Clark Center' was touring Japan. When I visited his museum in California and learned that he also collected bamboo baskets, we quickly became good friends.

One day, he asked me to see works by contemporary artist Uematsu Chikuyū. Some of Uematsu's works are larger than two metres wide, and I wasn't sure if I could find a space large enough to display them. It was then the local public museum in Uematsu's hometown kindly offered their space, which led to a one-day exclusive private exhibition. Bill was very pleased and acquired all of the pieces. In 2008, the Japan Society in New York held an exhibition titled 'New Bamboo: Contemporary Japanese Masters' and there was a special booth dedicated to Uematsu's works. It is all part of a fond memory now. Bill's collection, including Uematsu's works, was eventually donated to the Minneapolis Institute of Art and the Museum of Fine Arts, Boston after his passing.

It was around then that bamboo craft started to receive more recognition in Japan: general appreciation and pricing for bamboo crafts were soaring, with Rōkansai being at the centre of this trend. On the other side of the ocean in America, even galleries specialised in bamboo craft were opening. I started receiving inquiries and requests from abroad.

My own home, meanwhile, was overflowing with baskets. I held small exhibitions in galleries which helped organise my collection, but it was never enough. I constantly wrestled with the same dilemma: "I want to look for new baskets—but I have no money to buy them."

To sustain the cycle, I began selling works mainly to foreign collectors and museums, then used the proceeds to acquire new pieces. I found out that many bamboo works had already been exported overseas long ago, many of which had yet to receive proper appraisal. In fact, I bought back quite a large number of Japanese bamboo art pieces from foreign galleries.

The enthusiasm for bamboo craft in America soon spread to new generations and regions, with more collectors and museums developing an interest. Around 2007, a towering, nearly two-metre-tall American man visited my home in Tochigi to see my collection. As we talked, we discovered we had watched the same films, listened to the same music, and were even born in the same month of the year.

His name is Michael Sonnenfeldt and my dear friend now. Michael's knowledge in Japanese crafts ranges deep and wide, from bamboo to dolls. He sincerely cares for the future of Japanese culture, and is a major supporter of JapanCraft21, an initiative I helped launch in 2021 to nurture the future of Japanese craftsmanship.

The late 2010s saw a series of major exhibitions of bamboo art in renowned museums internationally; 'Japanese Bamboo Art: The Abbey Collection' held in the Metropolitan Museum of Art in 2017, and 'Fendre l'air : Art du bambou au Japon' held in Musée du Quai Branly – Jacques Chirac in Paris, France in 2018. On both occasions, Mr and Mrs Abbey and the director of Quai Branly museum Stéphane Martin came all the way to my home in Tochigi. I was delighted to welcome them, and honoured to assist with exhibitions as much as I could.

In 2016, the National Gallery of Victoria in Melbourne, Australia held 'Bamboo: Tradition in Contemporary Form,' featuring the Myer family collection. I was involved only slightly,

but was amazed when the Myers personally flew me in their own plane, something I had never experienced in Japan.

As international interest in bamboo grew, Japan too saw a wave of major exhibitions. Among them was 'Lines and Shapes, Lines and Spaces: The Bamboowork of Iizuka Rōkansai and Tanabe Chikuunsai,' a project I had long envisioned, realised in 2018 at the Kikuchi Kanjitsu Memorial Tomo Museum. It was a very significant and moving moment for me.

The following year, the MET's bamboo exhibition travelled to Japan as 'Japanese Bamboo Art From New York: The Abbey Collection' and was held at several museums, including the Craft Gallery of the National Museum of Modern Art, Tokyo.

Lately, I'm delighted to see younger artists and designers in fashion, architecture, and other fields rediscover bamboo art. Fashion designer Kurogouchi Maiko presented the Mame Kurogouchi 2023 collection inspired by the works of Rōkansai and other masters. I was invited to see the Paris show, which was wonderful: when a model wearing garments reminiscent of bamboo baskets walked the runway, someone in the audience shouted, "Rōkansai!"—a moment I will never forget.

This exhibition can be considered as a continuation of 'Bamboo Modern,' a smaller show held at the Mashiko Museum of Ceramic Art in 2023 centred on Yokota Hōsai. He collaborated with the French architect Charlotte Perriand and his work has drawn interest among those in architecture and interior design. Even now, the world of bamboo craft still holds countless fascinating artists and works that remain largely unknown.

My relation with bamboo art began as a casual curiosity, and now has become a forty-year journey, which has been filled with countless events, exhibitions, collaborations, and encounters with extraordinary works and people. The pieces in this catalogue are those that came in my hand during the period, and have stayed with me, closest to my heart.

Many that have passed from my hands have connected me to others around the world. I never imagined that bamboo baskets would bring so many people into my life, and the names I mention here are only a small fraction. Thanks to the friendship and passion shared by dozens and hundreds of people across the globe, both my own path and the world of bamboo art continue to grow. Sharing the same emotion and reaction with someone upon seeing the same object, and connecting with such people is, I believe, one of life's greatest joys.

**SAITO MASAMITSU**

